



Title	意味することのもどかしさ : シェイクスピアにおける言語と人間的行為の研究
Author(s)	村井, 和彦
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57864
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	むら い かず ひこ 村 井 和 彦
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 24069 号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	意味することのもどかしさーシェイクスピアにおける言語と人間的行為の研究ー
論文審査委員	(主査) 教授 玉井 暲 (副査) 教授 服部 典之 准教授 石割 隆喜

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、イギリス・ルネサンス文学を代表する劇作家ウィリアム・シェイクスピア（1564-1616）を取り上げ、その主要劇作品を対象にして、劇テキストにおける注目すべき人間的行為を表わす言葉を選び出し、言葉と人間的行為との間の複雑で錯綜した、しかし、それにもかかわらず豊かなダイナミズムを孕んだ相互関係を分析することにより、シェイクスピア演劇についての言語的・修辭的研究を実践した論考である。論文全体は、序論、15の章、結論と、付表、注、参考文献から構成されており、総頁A4判で336頁、400字詰め原稿用紙に換算して約1,000枚からなる大部の論文である。

本論文は、序論と第1章において、シェイクスピア劇における人間的行為と言葉の相互関係を分析・考察するにあたり、三つの段階から考察できることを明らかにする。まず第一段階として、食べる、殺す、跪く、立つ、座るといった、人間の最も「原始的」な行為がさまざまな比喩的意味を獲得していく過程に注目する。第二段階として、手足を切断するといった、人類の発達の歴史において文化的意味をもつに至った言葉が、劇空間において、逆説的に本来の比喩的力を失い、字義的特性を露にする場合である。第三段階として、話す、書く、読む、嘘をつくといった、言語行為に密着した人間的行為が言語文化のなかで固有の意味を帯びていく場合である。

論者は、まずシェイクスピアの劇テキストにおいては、以上の三つの段階から人間的行為と言葉の相互関係を考察できることを述べ、具体的に『タイタス・アンドロニカス』を取り上げて分析してみせる。以下、第2章からは、シェイクスピアの主要劇作品を取り上げ、本テーマの具体的な分析・考察に入る。

第2章『リチャード二世』を論じる章は修辭的行為と意味との複雑な関係を、第3章『アントニーとクレオパトラ』を扱う章は、動作主名詞と誇張法との関わりを論じる。第4章『終わりよければすべてよし』を論じる章は、衣装を着るという行為と、言葉によらなければ存在を意識しえないという矛盾を孕んだ人間像との関係について考察する。第5章『ロミオとジュリエット』を扱う章は、劇中における複合語のもつ創造性と分離容易性が二人の恋人たちの出会いと別れという行為と平行な関係にあることを明らかにする。

本論の後半では、第6章『冬物語』を取り上げる章は、「呼びかけ」の行為にはつねに誤解を生む危険を孕んでいることを明らかにする。第7章『嵐』を論じる章は、監禁するという行為の表象的意味を考察することにより、この世をすべて夢と見定め牢獄からの解放を図るヴィジョンがシェイクスピア最晩年の作品に読み取れることを主張する。第8章では、『ヘンリー五世』における演劇的遠近法に注目し、コーラス機能の活用により、言葉を通して戦場のスペクタクルという視覚的表現を成功したありようを分析する。第9章『尺には尺を』を扱う章は、テキスト空間に盗人の隠語が頻出する特徴に注目し、その意味を考察する。第10章『コリオレイナス』を論じる章は、劇中に見られる帽子を脱ぐという行為のもつ文化的・政治的意味を考察し、主人公コリオレイナスの悲劇との関わりを明らかにする。第11章では、『オセロ』において、同義語を羅列するシノニミーというレトリックの機能が特に悪役イアゴーにおいて発揮される意味を考察する。第12章は、フォルスタッフという喜劇的人物の魅力を、言葉の記号内容と記号表現とのあいだの無根拠性にあると見て、その演劇的言語の特質を分析する。第13章は『真夏の夜の夢』における「理解する」という形而上学的行為の意味を文体と観客との関係において考察する。

最後の2章は、本論の締めくくりとして、最も文化的に洗練された行為と思われる宗教的行為を扱う。第14章では、『リチャード三世』における祈りのドラマツルギーを考察する。第15章「シェイクスピアのカテキズム——宗教的行為の演劇化について」は、シェイクスピアが「教理問答」を演劇的に利用したありようを分析し、この宗教的儀式が究極的にパロディと化していく過程を明らかにする。

結論として、シェイクスピアの劇作品においては、言葉のもつ生産的・創造的なダイナミズムが人間的行為を表す言葉に明確に指摘できることを強調して本論を終える。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリス・ルネサンス文学を代表する劇作家ウィリアム・シェイクスピアの主要劇作品約20篇を対象にして、劇中の人間的行為を表す言葉に注目することにより、言葉における字義の意味が比喩の意味を獲得するありよう、比喩の意味が逆説的に字義の意味を前景化する言語状況、単純な身体的行為が複雑な文化的・政治的・宗教的意味を獲得していく過程等を、劇テキストの綿密で適確な読みを基にして分析・考察した研究である。このシェイクスピア劇に対する言語的・修辭的研究により、シェイクスピア演劇のもっていた極めて高度な言語使用の一面を鮮やかに解明できたことは、日本における従来のシェイクスピア研究に新しい視角を付加したものと高く評価されねばならない。論者は、昨今の新しい批評理論や研究方法論の勃興を十分に承知しつつも、そうした研究状況の表層に翻弄されることなく、みずから信じるテキストの精読を出発点として、しかもかつてのニュー・クリティシズムに代表されるような禁欲的・静的な分析姿勢ではなく、歴史的視点や文化的視点、場合によっては日本語母語の話者としての視点ともいえるべき立場を十二分に踏まえて、真正面から劇テキストそれ自体に立ち向かう姿勢を貫き通しており、この文学的研究の姿勢により、本論を説得的で確実な論考にまとめることに成功した。シェイクスピア演劇における、立つ、跪く、座る、読む、話す、書く、食べる、手足を切るといった人間的行為のもつ意味への考察は、修辭的研究の立場からだけでなく、身体論や文化論の立場からも大いに注目されるべき研究である。さらに本研究は、シェイクスピアの単なる個別的研究の範囲を超えて、人間の言語活動一般および言語自体のもつ創造的機能への洞察が随所に窺えるのも大きな魅力となっている。

ただし、本論文において疑問点がないわけではない。論者が注目する、シェイクスピアにおける人間的行為と言語との親密な相互関係は、歴史劇・悲劇・喜劇・ロマンス劇・問題劇等の間のジャンルの差異と関わりがあるのか否か、論者の「人間」観はシェイクスピアの時代と現代との間の文化的・歴史的距離を意識したものであるのか否かについて、もう少し説明があってもよかつたであろう。

しかし、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。